

穂高雪山 殺人迷路

梓林太郎

Rintaro Arusa





TOKUMA NOVELS

梓 林太郎

穂高雪山殺人迷路

発行者 松下武義

発行所 徳間書店

東京都港区東新橋一ノノ二六 一〇五―八〇五五

電話〇三・三五七三・〇一一

振替〇〇一四〇―〇四四三九二

© Rintarô Azusa 2001 Printed in Japan

落丁・乱丁はおとりかえいたします

〈編集担当 村山昌子〉

ISBN4-19-850531-4

書下し長篇山岳ミステリー

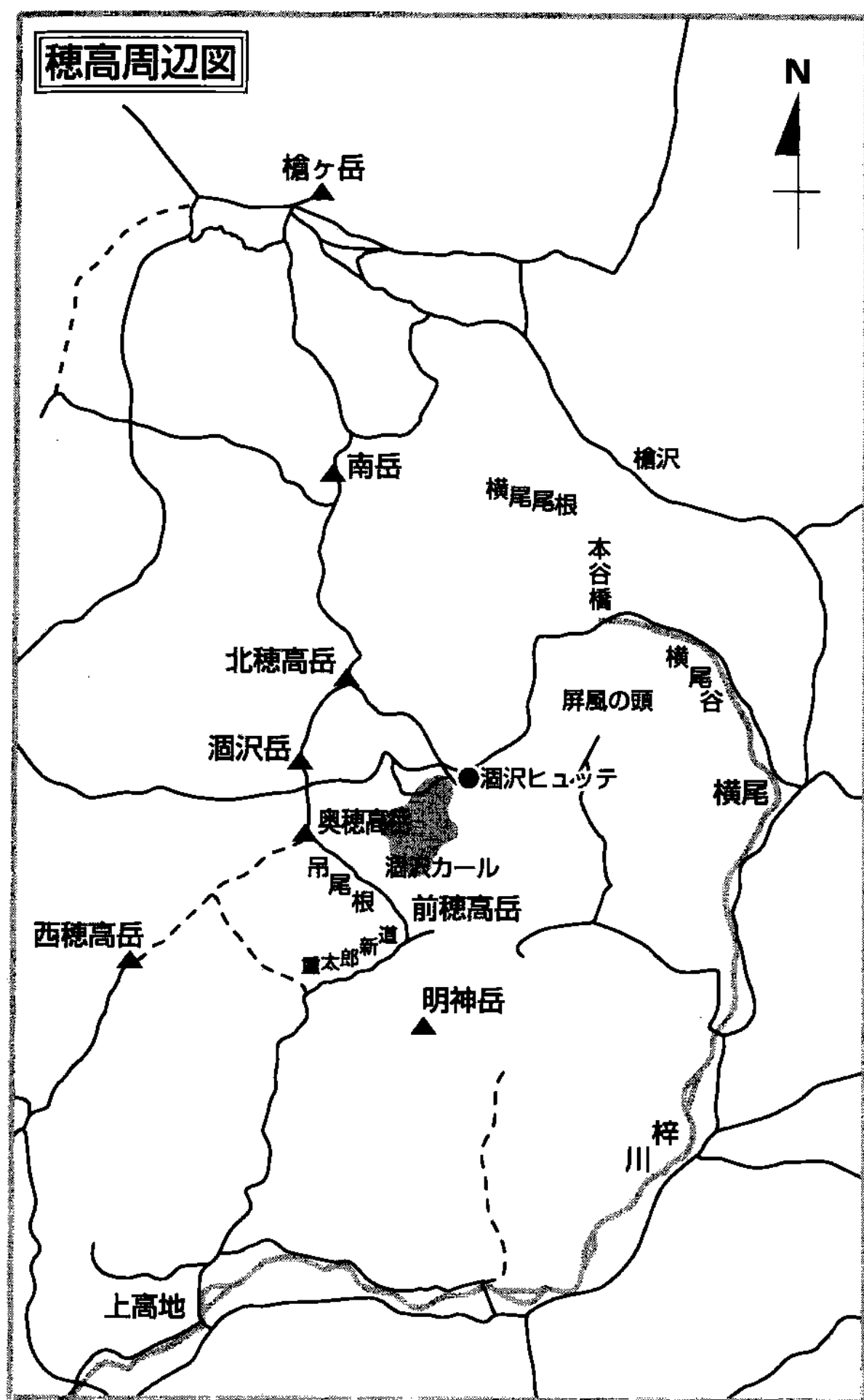
穂高雪山殺人迷路

梓 林太郎



徳間書店

TOKUMA NOVELS



地図作成／オーバーワークス

1

三月十二日の昼前、長野県警豊科署とよしなに入った電話は、山岳遭難救助隊の小室主任こむろのデスクにまわされた。電話を掛けてきた女性は東京の真中まなかと名乗った。「きのう帰ってくる予定で北アルプスに登ったパーティーから連絡がありません。東京も小雪がちらついていますし、山の天気もずっとよくなさそうでしたので、心配です」

彼女は心細そうにいった。

小室がきくと、彼女の夫の真中は四人パーティーのリーダーだという。

「入山したのは、いつですか？」

「三月七日です。四泊五日の予定でした」

「登山届は出していますか？」

「あると思いますが……」

彼女のいいかただと、四人パーティーの登山届の控を真中の妻は見えていないようである。

「登山地はどこですか？」

「穂高ほたかということしか知りません」

小室は、最近提出された登山届の入れてある箱を

引き寄せた。二十数枚が入っている。北アルプスは目下冬山である。今冬は例年になく積雪量が多い。山岳地帯は三月になってからもほとんど毎日雪が降っている。

リーダーが真中^{しやうへい}莊平の登山届が見つかった。彼は三十九歳。住所は東京都北区となっていた。

メンバーは、古田^{ふるたのりひろ}紀洋・三十五歳Ⅱ足立区。河津^{かわづ}学^{まなぶ}・三十一歳Ⅱ大田区。柳生^{やぎゆう}恵理子^{えりこ}・二十七歳Ⅱ杉並区。

小室がメンバーの名を声を出して読むと、

「柳生さんという方は女性ですか」

と、真中の妻はいった。リーダーの真中は、メンバーに女性を加わっていることを妻に話していなかったようだ。

「真中さんには、冬山の経験がありますか？」

小室はきいた。

「あります。学生のころから四季を通じて山に登っていたようです。結婚してからも毎年三回ぐらい登っています」

彼女の話によると古田も冬山を経験しており、真中とは何回も山行をともにしているという。河津については夫から名前をきいていたただけだといった。「柳生さんについては、どんなふうにきいていましたか？」

「今回の登山の前に主人から名字をききました。それまでは一度もきいたことのない方でした」

真中は、柳生が女性だから妻に詳しく話さなかったのだろうか。柳生恵理子は真中の知り合いなのか、それとも古田か河津の知り合いなのか。

四人パーティーの登山計画は、上高地^{かみこうち}―横尾^{よこお}―涸^{から}沢^{さわ}―北穂高岳。復路はそれを逆にたどる、となっている。山小屋が営業していない現在は、四泊とも幕

営のはずである。

「きょうが予備日というわけですね」

「予備日……」

彼女は首を傾げたようだった。

「天候不良とか、なにかのアクシデントがあつて、計画どおりの日程で帰れなくなったような場合、念のために一日を行程のなかに入れておく日のことです。登山者はたいてい予備日をもうけています」

小室は、登山知識に通じていないらしい彼女に説明した。

真中莊平という男は、たびたび山に登っていると、登山行程や、山での出来事などを妻に詳しく話したことがなかったのだろうか。

「今回のメンバーの家族からは、なにか連絡がありましたか？」

「ゆうべ、古田さんの奥さんから電話がありました。

真中たちから連絡があつたかときかれました」

それで彼女は、きょうになつて知人に電話し、きのう帰宅する予定の夫たちから連絡がないことを伝えた。知人は、「もう一日待ってみたらどうか」といったが、彼女は落着いていられなくなつて電話したのだという。

小室は、あしたからの搜索に備えるが、四人パーティーから連絡が入ったら電話してくれといつて、電話を切った。

「山の天気はどうだろう？」

小室は及川おいかわにきいた。及川は遭難発生のために出動する隊員の一人である。

「上高地にきいてみます」

及川は上高地交番に電話した。

上高地は四日つづきの雪で、穂高はまったく見えないという。

小室は气象台へ、あすの天気を問い合わせた。北アルプスは終日雪が降るという予報だった。

あしたも雪だと五日つづきの降りということになる。三月九日から降っているのだから、真中らのパーティーは、登山目的地の北穂へ登り着く前から天気に見放されていることになる。

「雪が降っていても登っただろうか？」

小室が及川にきいた。

「冬山経験の問題でしょうね」

「リーダーの真中と、古田は冬山を経験しているらしいが、あとの二人はどうか？」

「一人は女性ですね。冬山を経験していなかったら、参加しなかったと思います」

提出されている登山届には全員の住所、電話、緊急の場合の電話番号が記入されている。四人とも住所とはべつの電話番号が記入されているから勤め人

のようである。

小室は、古田紀洋の自宅に電話した。すぐに妻が応じた。彼女は山に登った夫からの連絡を、いまかいまかと待っていたにちがいない。

あしたの朝から四人パーティーの搜索をすることになっているが、その前にきいておきたいことがある、と小室は前置きした。

「古田さんには冬山の経験がありますか？」

「あります。おとしも正月に登りました」

妻の声はやや高かった。

「北アルプスですか？」

「白馬しろうまです」

「パーティー登山ですね？」

「そのときも四人で、真中さんも入っていました」

「今回のメンバーと同じですか？」

「真中さん以外はべつの人たちでした」

一昨年正月の登山は計画どおりだったという。

古田の妻の話しかたをきいていると、真中の妻よりは山の知識をそなえているようである。

「奥さんも山に登ったことがあるんですね？」

「主人と知り合ってから何回か登りました。子供ができてから登らなくなりました。わたしが登ったのは、夏と秋です」

「穂高はご存じですか？」

「紅葉の時季に涸沢までいっただけです。北穂へ登るつもりでしたが、雨が降ったのでやめました」

「今回のメンバーの河津さんと柳生さんをご存じですか？」

「出発の前にお名前をきいただけで、お会いしたことはありません」

「柳生さんは女性ですが、それは古田さんからきいていましたか？」

「女性……。それは知りません。何歳の方ですか？」

「登山届には二十七歳となっています」

「冬山に登ったことがあるのでしょうか？」

それを小室はききたかったのだ。

「河津さんと柳生さんのことを、奥さんはどんなふうにおききになつていますか？」

「お名前をきいただけです。三月に登るのですから、かなり登山経験のある人たちだと思います。女性が一人いるなんて、きいていませんでした」

女性が参加するときいたら、反対するのだったと
いいかげである。

「古田さんの健康は万全だったでしょうね？」

「一か月ぐらい前からお酒を控えていましたし、風邪もひいていません。……あのう、下山が遅れていることについては、どんなことが考えられます

か？」

「九日からずっと雪が降っています。今年は例年になく雪が深いんです。それで登り下りに手間どっているのだと思います」

「どのくらい積もっているんですか？」

「涸沢で七、八メートルです」

「そんなに……」

「パーティーは無線機を持っていますか？」

「無線機……。それはどうでしょうか。携帯電話は持っていますけど」

「携帯は通じません。念のために番号を伺っておきましょう」

妻は番号を答えた。彼女はきのうから何回も掛けているが、「電波の届かない場所にある」というコールが流れるだけだという。

古田も、自宅に登山届の控を置いていかなかった

ことが妻の話で分かった。妻に登山届を見せれば、メンバーの一人が女性だと知れるからではなかったかと、小室は推測した。

次に河津学の自宅に電話した。応答する人がいなかった。彼は独り暮しではないかと思われた。緊急連絡先の番号に掛けた。若い女性が会社名を答えた。河津の勤務先だった。用件を告げると男性に代わった。その人は河津の上司だと名乗った。

「河津になにかありましたか？」

上司は急^せき込むようにきいた。

「河津さんが山登りに出かけたことはご存じですね？」

小室はきいた。

「はい。山に登るといって休暇願いを出していますから」

「四人パーティーのリーダーの家族から搜索願いが

出ました」

「きょう出勤することになっていましたが、出てこないし、連絡もないので気を揉^もんでいました。河津が入っているパーティーは、どうなっているのでしょうか？」

「それは分かりません。きょうが予備日でしょうか、きょうじゅうに連絡のあることを期待しています。もし連絡がなかった場合、あすの朝、捜索隊が入山します」

「北アルプスに登ったはずですが、山の天気はどうなんでしょうか？」

「四日間雪が降りつづいています」

「吹雪^{ふぶき}でしょうか？」

「その可能性はあります。河津さんには冬山経験がありますか？」

「詳しいことは知りませんが、あると思います。毎

年何度か山に登っていましたから」

「それは、夏ですか、冬ですか？」

「去年はたしか秋に出かけました。冬に登ったかどうかは覚えていません」

「おたくの会社には、登山経験のある人はいますか？」

「いないと思います。三十人ばかりの社員ですから、登山をするかしないかはだいたい分かっています」
「もし冬山を経験した人がいましたら、あるいは捜索に協力していただくことになるかもしれない思ったものですから」

「あらためて社員に当たってみます」

小室は、河津は独身かときいた。

「独り者です。両親と兄弟は北海道にいます」

上司は小室がきかないことまで答えた。

小室は最後に柳生恵理子の自宅の電話番号を押し

た。河津と同じで応答がない。緊急連絡先となっている番号へ掛けた。そこは病院だった。彼女は病院の事務局員だということが分かった。

事務長が電話を代わった。

「柳生はあしたまで休暇を取っています」

「山に登ったことはご存じですか？」

「登山だといって休暇を取りました。彼女になにかありましたか？」

「四人で北アルプスの穂高へ登り、きのう帰ってくる予定でしたが、連絡もないことからリーダーの家族が心配して捜索願いを出しました」

「捜索願いを……」

事務長の声が変わった。

「柳生さんの登山経験を知りたいのですが、ご存じでしょうか？」

「知りません。あ、彼女のことをよく知っている者

に代わります」

しばらく小さな話し声がきこえていたが、

「お待たせしました」

といって女性が応じた。彼女は、

「北浜きたはまと申します」

といった。

小室は彼女に、柳生恵理子には冬山経験があるかをたずねた。

「あると思います。去年も山へいきましたから」

「何月にですか？」

「たしか十月ごろでした」

それでは冬山とはいえない。

小室は北浜に、山の知識をきいた。彼女はハイキングはしたが、本格的な山登りをしたことはないと答えた。こういう人には冬山がどういうものかは分からないだろう。

同僚に本格的な登山をしたことのある人はいないかときいたが、彼女は知らないといった。

小室は、冬山経験のある同僚がいたら電話をもらいたい、といった。

北浜の話で、柳生恵理子が独身であるのが分かった。病院に勤めて約四年経つという。

北浜との電話を切ったところへ、真中莊平の妻から電話が入った。真中から連絡があったのかと思つたら、

「まだ電話もありません。携帯も通じませんし、主人たちは、どうなっているんでしょうか？」

と、細い声でいった。

「真中さんは、お勤めですか？」

小室はきいた。

「会社員です」

「同僚の中に、冬山に登ったことのある人はいそう

ですか？」

「いると思います。主人と一緒に登った人がいますから」

「そのほかに、真中さんには山友だちがいますね？」

「学生のころから一緒に登っていた友だちが一人います」

「その人たちに連絡しておいてください。こちらではあしたの朝から、搜索に入りますが、場合によっては、友だちや同僚に協力を求めることになります。ですから入山できるように準備しておいていただきたいのです」

真中の妻は、「分かりました」と、小さな声でいった。

豊科署では県警本部に、あすの早朝から搜索を開始する旨を連絡した。冬山の搜索や救助は、原則と